

桶谷秀昭

二葉亭四迷と
明治日本



二葉亭四迷
と明治日本



桶谷秀昭

文藝春秋



ふたばていしめい
二葉亭四迷と明治日本

昭和六十一年九月十五日 第一刷

著者紹介

昭和七年二月三日、東京に生まれる。昭和三十年、一橋大学社会学部卒業。主な著書に『土着と情況』『近代の奈落』『夏目漱石論』『文学と歴史の影』『批評の運命』『天心 鑑三 荷風』『ドストエフスキイ』（平林たい子文学賞）、『中世のこころ』『昭和精神側面』『北村透谷』『中野重治 自責の文学』『保田與重郎』（藝術選奨）などがある。

定 価 二〇〇〇円

著 者 桶 谷 秀 昭

発 行 者 西 永 達 夫

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

〒102
東京都千代田区紀尾井町三十一二三
電話代表(〇三)二六五一二二一

印 刷 精 興 社

製 本 矢 嶋 製 本 社

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目
次

第一章	文学以前	7
第二章	東京外国語学校	27
第三章	インテリゲンチヤ	44
第四章	東京商業学校露語科中退前後	64
第五章	『浮雲』まで	88
第六章	『浮雲』	108
第七章	『浮雲』(続)	127
第八章	小説抛棄	147

第九章 喪心の人 169

第十章 浦塩・哈拉賓・北京 186
うらしほはるびんべきん

第十一章 北京警務学堂 205

第十二章 日露戦争 231

第十三章 『其面影』と日露戦後 252

第十四章 『平凡』——態度の文学 274

第十五章 ペテルブルグ 296

参考文献 325

あとがき 331

装幀

竹内和重

カバー及び扉の図案は『平凡』（文淵堂・如山堂 明治四十一年四月初版）見返しより

二葉亭四迷と明治日本

第一章 文学以前

東京豊島区、染井の墓地に、二葉亭四迷の墓がある。丈六尺に近いと思はれる堂々とした自然石の、むかつて右肩の辺に、二葉亭四迷、中央に、長谷川辰之助と刻まれてゐる。謹直丹念な書體であるが、固苦しい感じはない。気力の集中が生む、何ともいへぬ爽やかな感じがある。

この墓碑銘は、旧東京外国語学校の同窓、宮島大八の書である。書體は中鋒の書法といふ。中鋒といふのは、宋の徐鉉の書法で、筆の穂先をまつすぐに紙に立てて書くやりかたで、書かれた文字を日に映して視ると、画の中心に一縷の濃墨が浮かび上るやうである。

宮島大八は明治十五年、旧外国語学校清語科に入った。二葉亭の一学年下の同窓であるが、在学中は交際はなかつたらしい。しかし明治三十年、新東京外語（現在の東京外語大の前身）が創立されると、清語科主任となり、ほぼ同じ時期にロシア語科の教授に迎へられた二葉亭と同僚として知るやうになつた。が、二葉亭とおなじやうに官途に就くことを嫌ふ氣質の持主で、数年で辞任し、野に在つて善隣書院を經營し、多くの門弟を中国、滿蒙に送り出した。わが国の中国語教育の草分けである。

ところで、墓碑の裏面には、「大正十一年三月十三日 東京外国語学校卒業生有志及旧友合同建之」といふ文字が刻まれてゐる。いふまでもなく、二葉亭が死んだとき、遺族にかういふ立派な墓を建て

る余裕はなかつた。それどころか、二葉亭がペテルブルグの病院で書いた、眼を蔽はしめるやうな遺言状と「善後策」にみる事ができる、一家離散もやむをえぬ窮状であつた。

自分が死んだら、朝日新聞社から「多少の涙金」が降りるだらう。それを六等分する。先妻の二子は即時学校を退学して奉公に出る。老母は名古屋の実家に厄介になる。後妻は二子を連れて実家に帰る。そして時機をみて再婚するのもよい、といふ。

かういふ惨澹たる「善後策」を考へなければならなかつた窮状は、二葉亭がみづから招いたものといつていい。彼の拙劣な生涯のツケが廻つてきたといふのが、世間一般の見方であらう。

失敗者、といふ形容が、その堂々たる墓石を眺めてゐると浮かんでくる。その生涯のイメイヂと墓石の姿が、ちぐはぐだといふのではなく、寧ろたがひに切り離しがたい複雑な或る想ひを強ひる。北村透谷ふうにいふなら、きはめて拙劣な生涯が高大な未完の事業を暗示してゐる。尤も、透谷のいふ高大な事業は、飽くまで文士の仕事のことである。

しかし二葉亭は透谷のやうなロマンティックな文学への抱負を、つひに抱くことができなかった。文学への懷疑を折あるごとに語り、文士と呼ばれるのを何よりも嫌つた。彼の死後、友人、知己の回想が多く出たが、それらを読むと、彼が文士扱ひされて迷惑がり、激しく肚を立てたといふ逸話は、枚挙にいとまがない。

二葉亭は処女作『浮雲』を金のために書いた、と再三いつてゐる。ながい沈黙のあとに書いた『其面影』『平凡』も義理でやむをえずやつた仕事だといつてゐる。しかし、金や義理のための仕事に苦心惨澹してゐる。

その一生を誰がみても文学者としかしいやうのない人間が、生涯、文学への根底からの懷疑に憑か

れてゐた、そこから生まれた悲劇を、私は二葉亭四迷といふ人間のかもしだす雰囲氣として描きたいと思つてゐる。

これは、いはゆる文藝評論の発想からすれば逸脱したころみであるかもしれない。私は、文藝評論ふうの、二葉亭四迷の右のやうな矛盾する、悲劇的な生涯が孕む或るものを、「問題」として抽象するやりかたを極力避けようとしてゐる。

先に引き合ひに出した——これも文藝評論の口の一つだが——透谷の有名な文章の一節などが、二葉亭のことを考へると、つい浮かんでくる。「……彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れかへか去ることを常とするものあるなり。」（『人生に相渉るとは何の謂ぞ』）

私はこの文章が好きであるが、文学は「空の空なる事業」だといふ、いはゆる文学虚業説の信奉者としての透谷が好きなのではない。文学虚業説を透谷が唱へたといふのは、今日の文学通念からするイデオロギイである。

よく知られてゐるやうに、透谷のこの文章は山路愛山に対する論争文であつて、愛山の主張する、世道人心に益するところのある文学こそ、事業の名にあたひするといふ主旨に反駁したものである。愛山の文章事業説は、徳川時代の士大夫の文学意識の延長で、明治二十年代の読書社会の通念の暗黙の支持を受けてゐた。

だから透谷の反駁は、さういふ時代の通念を背景にした愛山の説からの強い風圧を受けずにはゐられなかつた。この風圧は、また、透谷の内側からも生まれた筈である。それを語つてゐるのがほかならぬ透谷の文章である。

「大丈夫の一世に立つや、必ず一の抱く所なくんばあらず、然れども抱く所のもの、必らずしも見る

べきの功蹟を建立するにはあらず。」——この露骨な漢文脈のスタイルこそ、士大夫の人生論の発想である。

つまり、透谷は、外と内との風圧に辛うじて耐へ、文学が空の空なる事業であるといふ、つらい自己認識を、叫ぶやうに語つてゐる。

ところで、二葉亭は、透谷のやうに語つたことは一度もない。二葉亭が文学を語るときの口調は、いつも自嘲であり、韜晦である。

二葉亭の公表された文学談は大部分が晩年の時期のものであるから、その口調に青年客気のたぐひがないのは、当然ともいへようが、そのかはり、成熟した文学者の口吻めいたものも微塵もない。

『私は懷疑派だ』といふ談話筆記など、さういふものの代表であらう。

だが、要するに、書いてゐてまことにくだらない。子供が戦争ごっこをやつたり、飯事をやる、丁度さう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足な故もあらうが、併しどんなに技倆が優れてゐたからつて、真実の事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解つてゐても、それを口にし文にする時にはどうしても間違つて来る、真実の事はなか／＼出ない、髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらばその上に幾らか現はれて来るので、小説の上ぢや到底偽ツばちより外書けん、と斯う頭から極めて掛つてゐる所があるから、私にや弥々真剣にやなれない。

併しながら、斯う云ふと、私一人を以て凡ての人を律するやうに取られるかも知らんが、さう云ふ心持でもないんだ。私一人がいけないんだね。たゞ自分がさういふ心持で、筆を持つちやどうしても真剣になれんから、なれるといふ人の心持が想像されない。真の文学者の心持が解らん。だから真剣になれるといふ人があれば私は疑ふ。が、単に疑ふだけで、決してその心持にやなれぬと断

定するまでの信念を持つてゐる訳でもない。雖然けれどもどう考へても、(以下略)

かういふ言葉を吐く氣質は、他人にとつても自分にとつてもきはめて厄介なものである。ああいへばかういふ、つむじ曲りがこれに似てゐるが、二葉亭の氣質の特徴は、何よりも自分にたいしてつむじ曲りであつた、といふところにあらう。他人にたいしてだけつむじ曲りなら、はた迷惑な人間にとどまるが、自分にたいするつむじ曲りは、つひに自己破壊におもむく。

彼は心の中に一匹の虫を生涯にわたつて飼ひつづけ、つひに飼ひ馴らすことができなかつた。

内田魯庵の『おもひ出す人々』の中の『二葉亭四迷の一生』は、二葉亭と同時代人の回想のうちで出色の評傳であるが、かういふことをいつてゐる。「二葉亭の文学嫌ひは……単純な志士氣質や政治家肌からでは無かつたが、夫程それほどに懊惱してヂリ／＼と興奮するまで文学を嫌ひ抜いてゐたのは、一つは『此のいやといふ存在の声』が手傳つてゐたのである。」

「いやといふ存在の声」とは『平凡』執筆当時、魯庵のてがみに返事を書いた、そのなかにある文句である。明治四十年、西園寺公の文士招待の会に二葉亭が欠席の返事を出した、そのことについて魯庵が、「西園寺侯の招宴を辞する如きは時の宰相たり侯爵たるが故に謝絶する詩人的狷介を示したもので政治的又は外交家的器度では無い」といふ意味のことをてがみに書いた、それにたいする激昂した文面の返事である。「首相の招待に応ぜざりしはいやであつたから也。このいやといふ声は小生の存在を打てバ響く声也。」

魯庵は、「青筋出して肝癢起した二葉亭の面貌が文面及び筆勢にあり／＼彷彿して、当時の二葉亭のイラ／＼した極度の興奮が想像された」と書いてゐる。

魯庵としては、ことのついでに一寸筆を走らせたただけであつたらうが、それはたしかに二葉亭の痛いところを突いてゐる。

ついでにいへば、西園寺公の招待に欠席した一人に漱石がゐる。漱石の場合も、いやだといふ理窟ぬきの声があつたと思ふ。しかしその理由をひとにきかれて、「ほとゝぎすしばし厠を出かねたり」といふ句を投げてよこす諧謔精神があつた。

二葉亭の異常なくらゐるの激昂は、なにも魯庵ひとりにもむけられたものでなかつた。山下芳太郎といふ二葉亭の友人の回想がある。山下は明治二十五年東京高等商業を卒業して、外務省に入り、のちに友友の重役、理事などを歴任した人であるが、明治三十九、四十年当時、西園寺内閣の総理大臣秘書官をつとめたことがあつた。二葉亭といつ、どういふきつかけで知り合つたか正確なことはわからないが、すでに明治二十四年に二葉亭から金十円を託されて、鎌倉材木座に結核の療養をしてゐた外語時代の二葉亭の友人奥野廣記のもとへ届けてゐるところをみると、高商在学中に二葉亭と知り合つてゐたことはたしかのやうである。

西園寺公の文士招待の人選に山下芳太郎が関係したことはないふまでもない。山下の回想によると、或るとき、二葉亭は、「君は僕が文士でないことを知つて居ながら、何故文士だなど、云つて僕を招待したのだと、非常な権幕で食つて懸かかつたといふ。

山下は次のやうに弁じた。君がいかに否定しようと、君が文士であることは世間周知である。百歩を譲つて、君の志が経国済民にあるとしても、「文章は経国の大業」である以上、経国の士が文士を兼ねてゐることはすこしもない。文士と呼ぶのに何の不都合がある。

しかし二葉亭は、自分の志は他にあつて、その志の成つたのちに文士の名を受けるのは名譽なことだが、まだ志の十分の一も達してゐないのだからと言つて、飽くまで納得しなかつたといふ。

ただ、「文章は経国の大業」といふ山下の旧時代の文学観が、二葉亭の激昂をいくらか慰撫した氣配がないでもない。

内田魯庵のやうに、二葉亭の経国済民の志そのものが狷介な文士氣質の空想にすぎないではないかといふ、身も蓋もない批判でなかつたことはたしかである。

ところで、かういふ挿話は、いろいろなことを暗示するが、結局、二葉亭は旧時代の人間ではなかつたかといふ判断の材料になり得ないこともない。

「二葉亭は近代思想の聡明な理解者であつたが、心の底から近代人になれない旧人であつた」といつたのは内田魯庵である。魯庵はこれを、『二葉亭四迷の一生』の「追録」として大正十四年に書いてゐる。

尤も、魯庵が、二葉亭を旧人だといふのは、単純な極めつけではない。二葉亭の近代人と旧人との複雑な葛藤、矛盾を充分承知のうへで、あへてさう断定したのであらうと思ふ。何かそこには、魯庵の冷静な認識よりは、二葉亭といふ人間に親しくつきあつた人が抱かざるを得ない強い愛憎の心理がはたらいてゐるのではないか。

坪内逍遙の『柿の蒂』は、魯庵の『二葉亭四迷の一生』とともに、二葉亭をもつともよく知る同時代人の回想であるが、その中で、二葉亭と魯庵をサミュエル・ジョンソンとボズウェルになぞらへてゐる。さういふ聯想からいふと、私はむしろ、ドストエフスキイの回想を書いたストラアホフの感情にやや似たものを、魯庵は二葉亭に抱くやうになつたのではないかと思ふ。

死んだあとになつて思ひ出すと、懐かしくてたまらなくなるやうな半面、嫌悪のあまり思ひ出すのも苦痛になるやうな複雑で強烈な個性の持主でおそらく二葉亭はあつた。

逍遙の『柿の蒂』で一等印象深いのは、高等商業に合併吸収された旧外語を退学した当時の二葉亭

と知り合つた頃の思ひ出である。

……で、彼れの性格までが、其時には気が附かなかつたが、著しくロシア文学の感化を受けてゐた。(中略) 怖ろしく内省的(精神分析論の所謂内向的)で、何事に対しても緻密で、精刻で、批判的なのだが、決して容易に断定はしない、常に疑問的で、じれつたい程に慎重な態度であつて、さうして其深沈な態度に一種不思議な魅力があつた。(此魅力が所謂デモニック・インフルエンスといふやつで、二葉亭に会つた者は挙つてそれに中てられたものだ。)彼れのやうな性格がわが同胞中にあるとは予想してゐなかつた私は、彼れの議論に驚くよりも、彼れの性格の特殊なのに驚かされた。

これは先の内田魯庵の、二葉亭は結局古い型の人間だつたといふ見方にたいする、真向うからの反証になつてゐる。「近代思想の聡明な理解者」どころか、ドストエフスキイやゴンチャロフ等の近代ロシア文学の思想が血肉化した、まつたく新しい人間の出現に驚いたといふ逍遙の言葉に誇張はなかつたであらう。

「デモニック・インフルエンス」と逍遙がいふ二葉亭の独特の魅力に若い日の魯庵もまた魅せられた一人であつた。

しかし、魯庵のいふ、二葉亭は旧人だといふ言葉には、それなりの含蓄があると思ふ。考へてみれば、新しい人間といふものが、過去からまつたく断絶したところに現はれる筈はないので、とくに明治維新以降の激しい過渡期に、ものごころつき、教育を受けた二葉亭の新しいさが、浮薄なハイカラと無縁であつた以上、そこに古い日本との複雑な葛藤が生んだ独特の個性の別名であることに、不